

「日本文化論」を通して考える 異文化理解の困難と可能性

『菊と刀』と『アメリカの鏡・日本』の比較分析

岩澤 知子

目次

1. はじめに
2. 『アメリカの鏡・日本』が展開する日本文化論
3. 『アメリカの鏡・日本』に対する日米両国の反応
4. 『菊と刀』が展開する日本文化論、およびそれに対する日米両国の反応
5. おわりに——異文化理解の困難と可能性

1. はじめに

第二次大戦後まもなく、アメリカで二つの日本文化論が上梓される。ひとつは、1946年に出版されたルース・ベネディクトの『菊と刀』であり、もうひとつは、1948年に出版されたヘレン・ミアーズの『アメリカの鏡・日本』である。文化人類学者であり、今や欧米における日本研究の第一人者として知られるベネディクトは、第二次世界大戦中に戦時情報局にあって戦略的な日本研究に従事し、その時の研究成果として、のちに『菊と刀』を出版した（日本での翻訳出版は1948年）。この書は、その後、日本文化論の代表作として、諸外国のみならず日本国内においても多数の読者を獲得し、現在に至るまで大ロングセラーとして読み継がれている。その一方、ミアーズの『アメリカの鏡・日本』は、ほぼ同時代にアメリカで出版された日本文化論であるにもかかわらず、アメリカ人でその存在を知る人は今やほとんどなく、日本における知名度も『菊と刀』に比べて格段に低い。実はこのミアーズは、戦中には知日派ジャーナリストとして名を馳せ、戦後の占領期には労働諮問委

員に任命されて来日し、労働基本法の策定にも携わった人物である。このように日本と深く関わった専門家の分析であったにもかかわらず、彼女の著した『アメリカの鏡・日本』は、アメリカ国内においてほとんど省みられることはなく、さらに興味深いことに、連合国軍・最高司令官ダグラス・マッカーサーの命令により、日本での翻訳は1953年の占領軍撤退後まで禁止されたのである。この二つの書がなす対照は、いったい何を意味しているのか。

本論は、この二つの日本文化論を比較考察し、さらに、アメリカおよび日本社会が、この各々の主張に対しどのように反応したかを分析する。興味深いことに、この二者のアプローチは、「異文化理解」を進めるうえでの対照的な態度を示しているのだが、本論は、この二つの異なる研究態度の比較分析を通して、これからの「異文化間対話」に向けて必要とされるものは何かを考察していく。

2. 『アメリカの鏡・日本』が展開する日本文化論

まず、アメリカにおいて問題の書とみなされた、ヘレン・ミアーズの『アメリカの鏡・日本』が描き出す日本文化論を分析することから始めよう。ミアーズは、1898年、アメリカ・ニューヨーク州で生まれた。ジャーナリストを目指して Goucher College (メリーランド州) で学び、卒業後、大学時代の友人と共に中国へ渡り、北京の大学で秘書としての仕事を見つけ、1年間中国に滞在。その間の1925年、10日ほど日本を観光目的で訪れたことが、彼女のその後の人生を大きく変えることになる。帰国後、ニューヨークで編集者の職を得て社会派ジャーナリストとして勤務するが、1935年にその職を辞し、再び日本を訪問。8ヶ月間の日本滞在中に、一般市民の何気ない生活に触れたり、旅行に出て地方の生活をつぶさに観察する機会を得た。この経験をもとに著した民俗学的・紀行エッセイともいえる日本文化論 *Year of the Wild Boar* (1942年) がアメリカで好評を博し、その後、知日派ジャーナリストとして名を馳せ、大学で日本社会について講義する機会をも得た。こうした業績から、戦後の占領期には労働諮問委員に任命されて三度目の来日を果たし、労働基本法の策定に携わる。アメリカに帰国後、再びジャーナリズムの仕事に就くが、アメリカ国内で徐々に強まっていく「異質な国・日本」というイメージの一人歩き現象と、自らが直接体験してきた日常生活レベルでの日本人像との間に大きなギャップを感じ、その問題意識のもと、第二作

目の日本文化論 *Mirror for Americans: Japan* (1948年、以下 MAJ) を著した。

『アメリカの鏡・日本』は、「アメリカ人にとってパール・ハーバーはいつたい何を意味するのか」という挑発的な問題提起から始まる。「パールハーバーは答えのない疑問である。数百万語に及ぶ証拠と新事実を盛り込んだ何種類もの公的調査と報告が出されているにもかかわらず（注：両院合同調査委員会によって1946年7月に提出された報告書を指す）、答えは依然はっきりしない。」(MAJ, 31) その真実の曖昧さにもかかわらず、ただひとつ明白だったのは、この衝撃的な事件によってアメリカ人の感情は爆発し、アメリカが日本との戦争を始めるのに十分な理由づけとなったことだった。

大惨事のショックから覚めたアメリカ人は、まずこれは晴天の霹靂であると思おうとした。納得いく説明のない神の行為のような、避けがたいものと思ったのだ。しかし、このショックで内向していた緊張と感情が解き放された。そして、それまでの問題と複雑さは、すべて噴出する怒りと憎悪によってご破産にされた。パールハーバーは裏切りの象徴となり、私たちの心に渦巻く憎悪と恐怖、不安と怒りはことごとく日本人に向けられていった。アメリカの責任を問わず、すべてを日本単独の一方的、計画的犯行として、憎まれものの国民を告発する単純な事件説明が、鬱屈した感情を発散させ、開戦の確かな理由づけとなった。(MAJ, 31)

しかしながら、ミアーズの醒めた目は、こうした一般の感情論に惑わされることなく、パール・ハーバーの真意を探ろうと、米国議会に提出された膨大な証言資料を読み解いていく。

パールハーバーの諸要因は政府説明よりずっと複雑であることが、公式調査の過程でわかってきた。政府は公式の対日批判の中で、この攻撃は「千年余に及ぶ内戦の歴史を基盤に、世界征服という唯一の目的で統合された」野蛮な民族の裏切りが引き起こした以外の何者でもないという。政府説明によれば、アメリカの政策担当者は、日本に侵略を思い止まらせるため、あらゆる手段を講じてきたのだった。そしてハル国務長官は、パールハーバーが一方的かつ裏切りの奇襲攻撃をかけられる瞬間まで、「天から何かが落ちてきて」東京の「盗賊政府」に侵略計画を思い止まらせてくれないものか、と祈り続けていたという。その後、軍と政府はパールハーバー問題の各種調査委員会における証言の中で、無能ないし職務怠慢とのかかわりを否定する自己釈明に努めるのだが、

それによって、政策担当者の公式発表が必ずしも正直ではなかったことが明らかにされた。……委員会が解明しようとした疑問は、あたかも訓練のように意図的に飛行機、艦船を集結させていた米軍基地が、敵の攻撃に捉えられたのは誰の責任か、ということであった。委員会の報告は膨大なものだが、これを読むと、陸・海軍当局は職務怠慢とみなされている問題に対する釈明として、国務省の政策にも責任があると主張している。……国務省の政策は日本に対して表立った軍事行動はとらず、代わりに経済的報復措置を徐々に強化していこうというものだったが、そのためにわが方の戦闘体制が整っていない段階で、日本の戦争意欲を促し、軍事力強化を助けたと批判している。さらに軍は、パールハーバーの損害の甚大さは、11月26日ハル国務長官が陸軍省に知らせることなく、日本に「最後通告」（日本は最後通告と解釈したもの）を突きつけたことと深い関係があるというのだ。……陸軍の報告書は最後通告が出された事実を確認したうえで、「11月28日、マーシャル将軍とスターク提督が明示した」日限以前に、ハル長官が最後通告を出したことを批難した。(MAJ、31-33)

こうした分析を通してミアーズは、パール・ハーバーは決して「晴天の霹靂」ではなく、アメリカ政府によって十分に予見された出来事であったとし、米国内に流布するイデオロギーと現実との乖離を指摘するのである。

アメリカ側のさまざまな公式声明から考えるならば、「卑劣な攻撃」「屈辱の日」は違う言葉で考え直す必要があるようだ。これは「世界征服」を企む野蛮人による「一方的」で裏切りの攻撃だったのか。あるいは、圧倒的に強い国との力のゲームに引きずり込まれたと思っている国が、経済封鎖に対して挑んだ攻撃だったのか。この違いは極めて大きい。どうやらパールハーバーは戦争の原因ではなく、アメリカと日本がすでに始めていた戦争の一行動にすぎないようだ。したがって「なぜ日本はわれわれを攻撃したか」を考えるなら、「なぜわれわれは、すでに日本との戦争を始めていたのか」について考えなければならない。そうでなければ、パールハーバーという難問を解くことはできないのである。(MAJ、34)

ここでミアーズが展開しようとするのは、単純なアメリカ批判でも、日本擁護でもない。彼女は単に、パール・ハーバーを「神話化」することに異議を申し立てているのである。ここでいう「神話化」とは、「イデオロギーに囚われた理性の硬直化」を意味する。パール・ハーバーを契機にアメリカ人に広まった「神話」によれば、日本人は「歴史的拡張主義者」かつ「伝統的軍

国主義者」であり、パール・ハーバーは彼らの「世界征服」の一段階に過ぎないと説明された。これに対しミアーズは、日本の歴史を客観的に読み解きながら、この見解の誤りを次のように指摘する。『『2600年もの間』、『世界征服』を目指してきた『世界で最も残忍な侵略者』が、かつて『一度も敗れたことがない』のに、パール・ハーバーの時点で、わずかに先祖伝来の小さな列島と周辺小さな島々と朝鮮半島から成る小国にすぎなかった、などという話があるだろうか』(MAJ、171)。さらに、彼女は言う。

文化と歴史を測る客観的判断基準は、その社会環境の中で経済・社会問題がどのように解決されたか、その文明が隣接国に対して侵略的だったか否か、の二点である。この点から判断すると、日本の伝統文明は高く評価されている。日本が総じて安定した非侵略的な独自の文明をつくってきたことは記録に明らかだ。近代以前の日本は少なくとも1800年の間、様式化され限定化された内戦の時代と、全体的混乱の一時期を除けば、平和と安定の中で文明を発展させ、人口を増やし、制度を整備し続けてきた。そして、外国を征服しなかったことは事実である。……私たちは日本国民を生来の軍国主義者として非難し、その前提の上に戦後計画を立てている。しかし日本国民を生来野蛮で好戦的であるとする証拠は一片もない。なによりも日本国と日本文明の歴史がそれをはっきり否定しているのだ。(MAJ、205)

こうしてミアーズは、アメリカに行き渡る「日本人神話」の解体を試みるのである。ここで改めて付言するが、ミアーズの批判は、日本人が「歴史的かつ伝統的に」侵略主義者・軍国主義者であったという誤った事実認識に向けられているのであって、19-20世紀にかけて、日本が確かに侵略主義へと転じていったことを否定しているのではない。その事実は強く非難されるべきだ、とミアーズは考えている。彼女の問いはしたがって、「ではいったい何が日本人を変えたのか」ということに向けられていく。

ミアーズが展開する詳細な歴史分析をすべて紹介する紙幅はなく、ここではわずかに要点を示すに留まるが、日本を大きく変えたのは言うまでもなく、幕末における欧米の強圧的な開国要求と日本進出であった、と彼女は指摘する。この経験によって日本は、欧米列強と互角に戦っていく国力を養おうと富国強兵を推進し、その当時の欧米のルールであった「帝国主義」へと歩を進めていく。その経過を、ミアーズは逆説的に次のように語る。

略奪が主な目的であり、極東より近いところに収奪できる土地があるうちは、西洋人にとって日本列島は無用の地だった。しかし19世紀に入って、貿易と投資が目的となり、広大で豊かな中国の潜在的市場性がみえてくると、日本は戦略的重要性を帯びてきた。日本との貿易はまだそれほど魅力的ではなかったが、戦略的にみると日本は中国の沿岸地帯を望む場所に位置していて、燃料と物資の補給基地に適していた。(MAJ、222)

この時期（1854年の日米和親条約締結を指す）から19世紀末までの日本はいわば半植民地だった。欧米列強の代表たちは、貿易のすべてを管理し、税率と価格を決め、沿岸通航を独占し、日本の金を吸い取り、99年間の租借権と治外法権に守られて日本に住んでいたのだ。列強は自分たちの植民地と中国で享受する特権的立場を日本にも持ち込んだ。この期間、ほぼ45年間にわたって、日本は欧米列強の直接「指導」のもとで「改革され、再教育された」のだ。日清戦争のあと、欧米はこの生徒の卒業を認定し、1899年に「不平等条約」最後の条項が書き改められた。列強は特権を返上し、日本は高校卒業証書をいただいて大人の仲間入りをした。そして、日露戦争で、日本は大学卒業論文を見事に書き終える。1919年、第一次世界大戦後の講話条約を協議するパリ会議は、日本がインターンを無事終えたことを認めた。日本は米英仏伊と並ぶ輝かしき「五大国」、すなわち時の「平和愛好国」の一員となった。日本は優等賞をもらって卒業したのである。(MAJ、226)

今日、私たちが日本を罰しているのは、彼らが自国でも国際社会でも凶暴になったからだという。日本人は内では全体主義者に、外では「凶暴で貪欲」になった。なぜなら、彼らはもともと侵略的であり、彼らの伝統文明が「戦争願望」をあおったからだ、と説明するのである。しかし、史実を子細にみると、答えはかなり違ってくる。近代日本が仲間入りした当時の国際社会は、政治・経済を中央管理しなければ生き残れない状況にあった。だから日本は中央集権国家になった。日本人は暴力と貪欲が基準であり、正当である国際社会に入ったから「凶暴で貪欲」になった。日本人に暴力と貪欲を組織する国際的技術を教えたのは外国の専門家たちなのだ。(MAJ、230)

西洋列強はいま、日本を激しく糾弾している。日本が「凶暴で貪欲」であったことは明白な事実だが、だからといって、列強自身の責任は、彼らが思っているようには、免れることはできない。日本の本当の罪は、西洋文明の教えを守らなかったことではなく、よく守ったことなのだ。(MAJ、386)

そして、「日本人神話」というイデオロギーに囚われたアメリカ社会に向け

て、ミアーズは、日本人の「凶暴と貪欲」に対する告発は、アメリカ人自身への告発に等しいということを我々は自覚せねばならない、と訴えるのである。

私たちは、日本人の性格と文明を改革すると宣言した。しかし、私たちが改革しようとしている日本は、私たちが最初の教育と改革で作り出した日本なのだ。近代日本は西洋文明を映す鏡を掲げて、アジアの国際社会に登場してきた。私たちは日本人の「本性に根ざす伝統的軍国主義」を告発した。しかし、告発はブーメランなのだ。(MAJ、168)

3. 『アメリカの鏡・日本』に対する日米両国の反応

1948年に出版されたこの衝撃的な本に対して、アメリカ社会は一斉に批判を投げつけた。本書出版後に学術雑誌に掲載された書評を JSTOR で検索したところ、全部で5件の書評が存在した。うち4件はミアーズに対する徹底批判を展開、肯定的に捉えたのは1件のみであった。これらのミアーズ批判に共通するのは、それが理性的判断を失った感情的反応の様相を呈していたことである。以下、その一端を紹介しよう。

コロラド大学の Earl Swisher は、ミアーズの歴史分析をまともに評価しようとはしない。彼はあくまでも歴史解釈の問題を避け、当面の現実的かつ政治的課題に話題を限定しようとする。

Earl Swisher (U. of Colorado), “Book Review: *Mirror for Americans: Japan* by Helen Mears,” *The Pacific Historical Review*, Vol. 18, No. 1 (Feb., 1949).

Miss Mears introduces some very interesting and valuable materials, particularly the findings of the United States Strategic Bombing Survey, showing the large-scale destruction of Japanese industry as well as of Japanese cities, the paucity of Japanese naval and air strength, and the effectiveness of the Allied blockade, especially in preventing much-needed oil and gasoline from reaching Japan. She points out this exhaustion of Japan to prove that the use of atomic bomb was a tragic and barbarous blunder on the part of the United States. The facts are valuable and incontrovertible, but deductions are always dangerous. The atomic bomb question is sure to be

perennial. It can be pointed out, however, that neither exhaustion nor peace feelers is conclusive “proof” that the war would have ended in terms acceptable by the Allies without either the atomic bomb or an invasion of the Japanese main islands... Of course, she urges that we “understand” the problem of Japan and Japan’s attempts to solve them; but Americans would be more interested in the present dilemma of Japan than in a repetition of the arguments to justify the seizure of Manchuria, China, and the South Pacific in 1931 to 1941. (今、アメリカ人が興味を持っているのは、歴史をどう解釈するかではなく、日本の当面の課題をどう処理するかだ。)

ワシントン大学の John M. Maki は、ミアーズの業績の学問的価値を決して認めようとはせず、単なる「一女性の感情的発言に過ぎない」と吐き捨てる。

John M. Maki (U. of Washington), “Book Review: *Mirror for Americans: Japan* by Helen Mears,” *Far Eastern Survey*, Vol. 18, No. 9 (May, 1949).

Her theme is that Japan has really not been responsible for what have been called her aggressive policies, but was forced by the West to become a practitioner of modern power politics and since her venture resulted so disastrously for her, the United States should profit from the Japanese example and refrain from the continued practice of power politics.... Miss Mears’ book is a bold and sincere statement of one woman’s sentiments on the problems of international relations in the modern world and of the occupation of Japan. To regard it as a serious analysis of those problems would be to place it in a category for which it was not intended and in which it would be exposed to damning criticism. (ミアーズ女史の本は、大胆かつ真摯ではあるが、所詮、一女性の感情的発言に過ぎないのであって、これを近現代の国際関係問題に対するまともな分析として取り扱うことは、まったく不適切であろう。)

ロンドンの John Morris は、ミアーズの議論の複雑さを理解せず、単純な英米批判として糾弾する。

John Morris (London), “Book Review: *Mirror for Americans: Japan* by Helen Mears,” *Pacific Affairs*, Vol. 22, No. 2 (Jun., 1949).

The greater part of [Mears'] book is devoted to attacking the United States and Britain, which, according to Miss Mears, were mostly responsible for Japan's decision to adopt a policy of aggression.... The fact is that Miss Mears has not the necessary knowledge (nor the properly-trained historian's lack of bias) to criticize the higher policy of the United States government, and her cynical and ill-informed attack upon the Department of State is not helpful in the settlement of world affairs. (この本の大部分は、アメリカとイギリスを攻撃することに向けられている。というのも、ミアーズ女史によれば、日本が侵略政策を取ったことの責任の大半が、この二国に帰せられるからである。)

ノース・ウェスタン大学の Richard W. Leopold は、ミアーズの研究を「学部生の論文レベルにすら達していない」と口汚くののしり、その意義を過小評価する。

Richard W. Leopold (Northwestern U.), "Book Review: *Mirror for Americans: Japan* by Helen Mears," *The Mississippi Valley Historical Review*, Vol. 35, No. 4 (Mar, 1949)

She is convinced that not until we destroy our smug complacency, not until we free ourselves from wartime propaganda, not until we re-examine with humility our entire post-Perry performance can we hope to promote peace in the Far East or to convince dependent peoples everywhere of the sincerity of our professed ideals.... The glaring factual errors, gross oversimplification, and numerous non-sequiturs here noted would disgrace an undergraduate paper.... There is nothing here for the historian in his professional capacity. (明らかな事実誤認、行き過ぎた簡略化、さらには無理な推論の数々など、この作品は学部生の論文レベルにすら達していない。プロの歴史家にとって意味のある内容など、ここにはまったく見当たらない。)

こうした批判の嵐の中、ミアーズの業績を肯定的に評価したのは、ジョン・エンブリーによる次の書評のみであった。エンブリーはアメリカの社会人類学者で、戦前(1926年・1932年・1935-6年)日本を訪れて民俗社会学的フィールドワークを行った人物である。その分析は、『日本の村—須恵村』(英語出版1939年)として出版されている。

John F. Embree (U. of Mass), “Book Review: *Mirror for Americans: Japan* by Helen Mears,” *American Sociological Review*, Vol. 14, No. 3 (Jun., 1949). While many of the data are old and familiar, her interpretation of these data are new enough to have aroused most of the newspaper book reviewers to condemn *Mirror for Americans* as dangerous thought... A factor of real significance is that Japan, an Asiatic country, was trying to behave as a political equal of a European nation. This fact, often overlooked, probably accounts for a great deal of the conflict between Japan and the West and ultimately may account for further trouble between other parts of Asia and the West. By the record, as Miss Mears shows, Japan did nothing in the past century not done equally by Britain, France and, by association, by the United States. But these were “white” nations. The problem of race relations in international relations is a real one and Miss Mears’ book is one of the first to give it serious treatment. For the reason, *Mirror for Americans - Japan* is a contribution to the sociology of nations. (真に重要なのは、アジアの国である日本が、西欧と政治的に対等な立場で振舞おうとしたことである。この事実はしばしば無視されるが、日本と西欧との衝突、そして更には、アジア諸国全体と西欧との問題を説明するうえで、たぶん最も重要な点であろう。……国際関係を考えるとき人種問題は本質的であり、ミアーズ女史の本は、この問題を初めて真面目に取り上げた。その意味で、『アメリカの鏡・日本』は、「国家間の社会学」を論じる重要な作品である。)

これに対し日本国内では、ミアーズの本はいかに受け止められたか。実はこの本は、連合国軍・最高司令官ダグラス・マッカーサーの命令により、日本での翻訳は、占領軍撤退後の1953年まで禁止された。しかしながら、1953年の翻訳出版（文藝春秋新社より『アメリカの反省』と題して出版）に到っても、この本が積極的に取り上げられることはなく、そのあと実に約40年間、ミアーズの業績は忘れ去られることになる。この本が改めて脚光を浴びるのは、戦後50年を経た1995年、アイネックス社より『アメリカの鏡・日本』と題して、日本における第2回目の翻訳出版が刊行された時である。その翌年には、ミアーズの生涯と業績を詳細に調査分析した『忘れられた日米関係——ヘレン・ミアーズの問い』（御厨貴・小塩和人共著、ちくま書房）が出版され、更に2005年には、『抄訳版 アメリカの鏡・日本』（角川学芸出版、新書版）が登場して、ミアーズの業績に対する注目が集まった。この時、日本の評者たちは『アメリカの鏡・日本』を、「アメリカを論じても日本を論じて

も、感情論の枠にいかにして取り込まれず、自らの強靱な論理を構築することができるか¹⁾を示す書であり、「敵国の視点に一度徹底的に身を置いてみる知的公正の実験者である」²⁾と評価した。第二次大戦において敗戦を経験した日本人が、戦争に対する感情的拒否反応から解放されて、より理性的に、世界史的視野に立って日本が行ったことの意味を考察しうるまで、実に50年を要したというべきか。『アメリカの鏡・日本』は、単純な日本擁護論でもアメリカ擁護論でもない。それは、我々が他者を理解するうえで、いかに感情的なイデオロギーに曇らされることのない強靱な理性を發揮しうるかを問う挑戦的な書なのである。

4. 『菊と刀』が展開する日本文化論、およびそれに対する日米両国の反応

『アメリカの鏡・日本』が出版される2年前、アメリカでは既に、ルース・ベネディクトによる日本文化論 *Chrysanthemum and the Sword* (『菊と刀』、以下CS) が登場していた。文化人類学者であり、今や欧米における日本文化研究の第一人者として知られるベネディクトは、文化の統合性を強調し、そこから各文化には固有のパターンがあり、しかもそのパターンには性格があるとして、人間の性格と文化との関連を探る「文化の型」論を展開した。第二次大戦中(1943-45)には戦時情報局にあって戦略的な日本研究に従事し、その時の研究成果として、1946年、のちの日本人論の源流となる『菊と刀——日本文化の型』を出版する。この書で彼女は、日本人の行動や文化からその背後にある独特な思考や気質を解明し、それを「菊の優美と刀の殺伐」に象徴される日本文化の型として提出した。アメリカ社会が『アメリカの鏡・日本』を徹底的に批判したのとは対照的に、『菊と刀』は、アメリカ国内で大変な好評を博し、日本文化論の代表作と見做されるようになる。

その一方、日本国内においては、1948年の翻訳出版以後、このベネディクトの業績に対して賛否両論が巻き起こった。賛成派によれば、(1) ベネディクトが提出した「集団主義」と「恥の文化」によって象徴される日本文化の型は的を射た分析であり、さらに(2) 分析対象に迫る際の彼女の文化相対主義的研究態度は、異文化理解における従来の欧米中心主義的な理論枠組みから大きく踏み出した画期的な試みである、と評価される³⁾。これに対して反対派は、(1) この研究が文化人類学における基本的な方法論を備えておらず

(①ベネディクトは日本語の知識を持たなかったため、研究材料が英文資料に限られ、②インタビュー調査の対象者は、当時アメリカに住んでいた日本人移住者のみであり、③研究にあたって日本を訪れた経験は一度もなかった)、従って(2)彼女の分析内容には様々な誤解や偏向が見られ、学問としての客観的・科学的価値に対する疑問を呈さざるを得ない、と主張した⁴⁾。

こうした賛成派・反対派それぞれの批評もさることながら、ミアーズとベネディクトの比較分析から明らかとなるのは、異文化理解における両者の研究態度の相違である。ベネディクトの態度を何よりも雄弁に物語るのは、『菊と刀』の冒頭部であろう。それは次のように始まる。

Chapter 1 Assignment: Japan (「研究課題：日本」)

The Japanese were the most alien enemy the United States had ever fought in an all-out struggle. In no other war with a major foe had it been necessary to take into account such exceedingly different habits of acting and thinking... We had to understand their behavior in order to cope with it. (CS, 1)

ベネディクトはまず、自らの研究対象が「異質」であるという前提から出発する。言い換えれば、彼女の研究は最初から一定の価値判断に基づいて構成されているのである。彼女自身がここで述べているように、この研究の目的はしたがって、そのような「異質な敵」といかに渡り合うかを示すことにあり、その目的に向けてベネディクトは、日本とアメリカの文化・思想の違いを際立たせながら叙述していく。

彼女がその日米相違点の中心に置いたのは、「秩序と階層制度の国・日本 vs. 自由と平等の国・アメリカ」という対比であった。ベネディクトによれば、パール・ハーバーを引き起こした原因も、まさにこの思想対立(アメリカ人による「自由」への希求 vs. 日本人による「階層秩序」への執着)に存すると説明される。

いやしくも日本人を理解しようとするに当たって、まず取り上げねばならないのは、「各々其ノ所ヲ得(各人が自分に相応しい位置を占める)」ということの意味について、日本人はどう考えているかということである。秩序と階層制度に対する彼らの信頼と、自由と平等に対する我々の信仰とは、まったく対極にある。我々アメリカ人は、階層制度を社会機構にとって必要な要素とみなすことはできない。……日本人は国内問題を階層制度の見地から眺めてきたのであ

るが、国際関係をもまたすべて同じ見地から眺めてきた。(CS、60)

真珠湾攻撃のまさにその当日にも日本の使節は国務長官コーデル・ハルに、この点を次のごとく明確に述べた声明書を手渡した。「万邦ヲシテ各其ノ所ヲ得シメントスルハ帝国不動ノ国是ナリ 右ハ万邦ヲシテ各其ノ所ヲ得シメントスル帝国ノ根本国策ト全然背馳スルモノニシテ帝国政府ノ断ジテ容認スル能ハザル所ナリ」この日本の覚書はその数日前のハル覚書、あの、日本で階層制度が重んじられているのとちょうど同じように、アメリカで基本的なものとみなされ尊重されているアメリカ人の原則を述べた覚書に対する回答であった。ハル長官は、各国の主権および領土の不可侵、他国内政に関する不干渉、国際間の協力と和解への依存、ならびに平等の原則、の四原則をあげた。これらはいずれもアメリカ人の平等と不可侵の権利の信仰の眼目をなすものであって、我々が国際関係のみならず、日常生活そのものがそれに基づくべきであると信じている原則である。「平等」は、よりよき世界の実現を願うアメリカ人にとって、最も崇高で道徳的な基礎をなすものである。……我々は、我々自身がそれを侵害する時でさえもなお、平等の徳を支持する。そして正しい憤りをもって「階層制度」と戦う。(CS、61-62)

すなわちベネディクトによれば、パール・ハーバーは、政治的・外交的要因によってではなく、階層秩序に異常に執着する日本人の病的特性によってもたらされたと解釈されるのである。Richard Minearが指摘した通り、「ベネディクトの作品には、日本を病的とみなす要素が強く働いており、彼女の主張では、パール・ハーバーこそ、その病気の典型的な表れということになるのである。」⁹⁾『菊と刀』の最終章でベネディクトは、アメリカによる日本占領の意義を次のように語って本書を締めくくる。

アメリカにおいて我々は、講和条件を厳格にすべきか、寛大にすべきか、ということについて果てしない議論を繰り返してきた。真の問題は、厳格か、寛大か、にあるのではない。大事なことは、多すぎず、少なすぎず、必要程度の厳格さをもって、(日本人の)古くて危険な侵略的(攻撃的)性質の型を打破し、新しい目標へと向かわせることである。どういう手段を選ぶかということは、その国民の性格により、またその国の伝統的社会秩序によって定まる。(CS、368)

ベネディクトが、日本文化の「病的特性」と見做したものに、日本人の

「伝統的攻撃性」が挙げられる。彼女は、この「伝統的攻撃性」こそが、日本人を侵略戦争へと導いた原因であると主張する。したがって『菊と刀』の大半は、この日本人の攻撃性が、日本の長い伝統の中で、いかに強力に培われてきたかを示すことに充てられている。では、その「伝統的攻撃性」を育てた日本的土壌とはいかなるものであったのか。ここにおいて『菊と刀』の中で最もよく知られたベネディクトの理論——「(西欧的) 罪の文化」と「(日本的) 恥の文化」との対比——が登場する。

さまざまな文化の人類学的研究において重要なことは、恥を基調とする文化と、罪を基調とする文化とを区別することである。道徳の絶対的標準を説き、良心の啓発を頼みにする社会は、罪の文化 (guilt culture) と定義することができる。……真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行うのに対して、真の恥の文化は外面的強制力にもとづいて善行を行う。恥は他人の批評に対する反応である。(CS、272-3)

一見、的を射た対比のように思わせながら、実はこの議論にこそベネディクトの比較文化論の最大の問題点が存在する。というのも、異文化を分析するにあたっての彼女の判断基準が、常に西欧的枠組みに依拠したものでしかないからである。ベネディクトは、西欧近代の「心身二元論」とそれに基づく「善悪二元論」を人類にとっての普遍的な道徳価値として措定し、この道徳観念に基づいて「日本人にはそもそも道徳律が欠如している」と結論づけるのである。

日本人の「人情」観は……肉体と精神という二つの力が、たえず対立しながら闘っていると考える西欧の哲学を根底から覆す。日本人の哲学では、肉体は悪と見做されない。可能な肉体の快樂を楽しむことは罪ではない。精神と肉体とは、この宇宙において対立する二大勢力ではない。そして日本人はこの信条を論理的に押し進めて、世界は善と悪との戦場ではないという結論にまで持ってゆく。サー・ジョージ・サンソムは次のように述べている。「日本人はその歴史のどの時代においても、このような、悪の問題を認識する能力の欠如、もしくはそれと正面から取り組むことを回避するような態度を、何らかの程度において保持してきたように思われる。」事実、日本人は、悪の問題を人生観として承認することを終始こぼみ続けてきた。彼らは人間には二通りの魂があると信じているが、それは互いに争い合う善の衝動と悪の衝動とではない。それは

「柔和な」魂（和魂）と「荒々しい」魂（荒魂）とであって、すべての人間の生涯には、「柔和」であるべき場合と、「荒々しく」あるべき場合とがある。一方の魂が地獄に、他方が天国に行くことと定まっているのではない。この二つの魂はともに、それぞれ異なった場合に必要であり、善となる。彼らの神々でさえ、同じように顕著に善悪両方の性質を兼ね備えている。……日本人は終始、徳とはすなわち悪と闘うことであるということ、きわめて明瞭に否定してきた。彼らの哲学者や宗教家たちが何世紀もの間、たえず主張し続けてきたように、そのような道徳律は日本人には相容れない。(CS、231-233)

ベネディクトの主張は、果たして正しいであろうか。日本人にとっての「悪」というのは、確かに西欧的な「悪」（ここでベネディクトは、西欧では「肉体こそが悪である」と語っている）と闘うことではないだろう。しかしながら、日本人にとっての「悪」とはそれとは異なる論理で語られるものであって、日本人に「悪」の概念がないわけではない。日本文化は、西欧が言う「精神（善）と肉体（悪）の対立」を前提としないだけなのである。例えば柳田國男は、日本人の道徳律の中心に「罪業観」が存在することを指摘して、次のようにベネディクトに反論する。

中古以来の文献はさらなり、私ほど年取った者の普通の見聞でも、日本人の大多数の者ほど『罪』といふ言葉を朝夕口にしていた民族は、西洋の基督教団にも少なかったらう。……ベネチクトは此本の中で、仏法の教へが是ほど深く入り込んだ国なのに、輪廻転生の教理が一向に体得されて居ないのは不思議だといふようなことを書いて居たと思ふが、それは明白に事実と反する。第一に仏法の力は、実は一部にしか行はれて居なかったにも拘らず、この罪業観ばかりは最も広く徹底しているのである。……日本人のあきらめの良さは、この世の悩み苦しみを悉く、前の生に於ける我が魂の悪業に基づくものと解して、愈々今生の行為を慎しむとしたのであった。神道の罪は祓ひと贖ひとによって、この世ながらに浄め消すことが出来たのに反して、仏法ではそれを次々の生まで、持ち越すものと教へられた為に、因業という言葉が、つひにこの不可解なる悲痛事の、別名ともなったのである。（『尋常人の人生観』『民俗学研究』第14巻・第14号、1949年）

現代の比較文化論・異文化理解は、この『菊と刀』の次元を超えていかなければならない。ここに現れた「西欧中心主義」的価値判断を脱して、我々は、それぞれの文化がもつ固有のコンテクストに沿って、各々の文化の世界

観・価値観を解釈していく道を探究しなくてはならない。

5. おわりに—異文化理解の困難と可能性

以上述べて来たように、実はミアーズの『アメリカの鏡・日本』が論敵とした「日本人神話」（日本人の「伝統的」攻撃性）は、ベネディクトの『菊と刀』によって、広くアメリカ人に共有されることとなったのである。かなりの説得力をもって読者に受け入れられた、その「神話」の内容の是非をさらに詳しく議論することは別稿に譲るが、少なくとも、この二つの書——『菊と刀』と『アメリカの鏡・日本』——が、それぞれどのような視点を前提として研究対象に向き合ったかを明らかにすることは、「異文化理解」の方法を論じるうえで重要であろう。

ベネディクトが、アメリカ的価値基準を前提に、日本人の「生」の実感に降り立つことなく、日本文化に関する客観的資料の寄せ集めから、周到かつ壮大な抽象的構築物としての日本文化論を打ち立てたのに対し、ミアーズは、時代の感情や偏見に絡め取られることなく、自らが体験した日本人の「生」の実感に寄り添いながら、あくまでも批判的理性を保った中立的な立場で日本文化を記述しようとした。その結果、ベネディクトの『菊と刀』が、アメリカ人にとっての「異質な他者・日本」を強調することに終始したのに対し、ミアーズの『アメリカの鏡・日本』は、日米の対立を超えた世界史的視野で、日本という「隣人」——それはアメリカ人自身を写す鏡に他ならない——を分析することとなった。言い換えれば、ベネディクトの日本文化に対するアプローチが、あくまでも「外部者」による「抽象的」かつ「戦略的」な他者理解にとどまったのに対し、ミアーズのそれは、自らの「経験」を通して、日本文化が伝統的に育んできた内在的価値に迫ろうとする「対話的他者理解」を目指すものだったと言えよう。

2005年にユネスコがパリで開催した国際シンポジウム「文化の多様性と通底の価値」の最終公式声明は、「文明が衝突するのではなく、『文明に関する無知』が紛争を招くのである」と述べたうえで、その解決への道として「文明間対話」の重要性を強調している。では、この「対話」とは、いかにして可能か。『菊と刀』と『アメリカの鏡・日本』という二つの対照的な日本文化論は、この問いに対するひとつの重要な示唆を与えてくれるものと考えられる。

参考文献

- 1) 御厨貴・小塩和人『忘れられた日米関係—ヘレン・ミアーズの問い』(ちくま新書、1996)、186.
- 2) 前掲書、184.
- 3) 青木保『日本文化論の変容：戦後日本の文化とアイデンティティ』(中公文庫、1999)、31-55.
- 4) 「特集 ルース・ベネディクト『菊と刀』の与えるもの」『民族学研究』第14巻・第14号(1949)、および Richard H. Minear, “Cross-Cultural Perception and World War II: American Japanists of the 1940s and Their Images of Japan” in *International Studies Quarterly*, Vol. 24, No. 4 (1980) を参照。
- 5) Richard H. Minear, “Cross-Cultural Perception and World War II,” in *International Studies Quarterly*, Vol. 24, No. 4 (Dec. 1980), 564.